

萩藩家臣団の仮名・実名、名字をめぐって

河本 福美

はじめに

江戸時代、武家に生まれた男子には、まず童名（わらわな、幼名）が付けられた。その後、元服（成人）すると、童名を改めて男名（おとなな）が付けられた。元服の年齢は、一般的には一五歳だが、その家の事情によって幅があった。童名も男名も、仮名（けみよう、通称）として日常的に彼を指す名前として通用した。また元服の際には、諱（いみな、実名（じつみよう））を持つようになる。諱は忌むべきもので、通常は名乗るものではなくった。

仮名も実名も様々な事情によって替えることがあったが、元服した際の男名と実名で生涯を過ごす者もいた。なお家臣のなかには、隠居後に剃髪して法名を名乗る者や、俳諧や絵画などを嗜んで、俳号・雅号などを持つ者もいた。

小稿は、萩藩家臣団の仮名（通称）・実名（諱）、名字をめぐる諸問題について関連資料を紹介し、若干の考察を試みるものである。

一 元文五年の「同氏同名」問題

現代社会において、同じ職場や学校のなかに同姓同名の人物がいたら、その人たちを区別するためにどうするだろうか。

この問題は、萩藩の家臣団内部でも生じていた。関ヶ原戦後、毛利氏は中国地方八か国から周防・長門二か国に減封となった。財政難という問題を抱えながらも家臣団の数は、次第に増加していった。家臣の兄弟を別家として取り立てたり、牢人などを新規に召し抱えたりするなど、江戸中期頃には総数五六〇〇人以上に膨らんでいた^①。このうち、名字を名乗れる家臣の数は、およそ二七〇〇家であった。「同氏」（同称号、同名字）

の家も多く、宝暦十三年（一七六三）の「いろは寄分限帳」②によると、井上五五家・栗屋五二家のように五〇家を超す名字もあり、自然と「同氏同名」の問題が起きたようだ。「同氏」の家臣が多ければ多いほど、仮名が重なることも当然起きうる。萩藩では、知行持ちの家臣を分限帳に、知行を持たない（無足）家臣は無給帳に、それぞれ禄高と名前が登載された。以下、分限帳・無給帳双方を指すときは、給禄帳と記す。

元文四年（一七三九）十一月、給禄帳の改訂が行われた。その際、家臣本人に加えて嫡子の仮名（通称）も登載されるようになった。このことによって、家臣の名前の数が増え、「同氏同名」の家臣の存在が目立つようになったのだろうか。改訂から一年、元文五年の暮には、「同氏同名」の家臣が複数存在することが確認され、遠近方に次のような指示が出された③。

御家来中数多同氏同名有之ニ付、相改候様ニ与被仰出候付、分限帳見合、左之通相調差出候処、元文五申十二月十八日及御聞、同称号同名申談、年内名替仕候様二との御事ニ而、末国与左衛門と遠近方江此付立被相渡候事

同称号ノ同仮名

御手廻組

中村次郎左衛門

御供徒士

同断

御手廻組

小左衛門嫡子

佐々木九郎右衛門

地徒士

同断

（計一四組、一二組分は省略）

右分限帳見合せ申候分如是御座候、此外二茂同称号同仮名之分可有御座候得共、委細ニ讃談被仰付候へ者、一通り御家来中本人・嫡子共御役所分限帳ニ而見合、隠居者之儀者諸支配方之付出を取、孰茂いろは寄ニ相調、其上ニ而同称号之書寄せを仕候儀御座候付而、引しらへ旁日数懸り可申様ニ奉存候事（欠字は省略した）

家臣のなかに「同氏同名」の者がいるので精査するよう指示があり、遠近方が一四組の家臣を確認し報告を上げた。藩主宗広は、同年十二月十八日、「同称号同名申談、年内名替仕候様二との御事」と、該当の家臣は相談して年末までに「名替」をするよう命じ、その際、次のような指示を出した。

御家来中数多之儀故、同氏同名之者有之紛敷儀候条、本

人・嫡子共二追々申合せ相改候様との御事

但、双方古来家筋之名二而、一方計改候様難仕面々々

儀ハ、双方共先一往相改候様と之御事

元文五申

十二月十八日

「双方古来家筋之名二而」つまり双方の家がそれぞれ由緒ある名前だと主張した場合、一方だけ改めるのは難しいので、まず双方改めるようにと指示した。

なお、この時点で確認漏れがあるかもしれないと、家臣本人と嫡子については「御役所分限帳」（遠近方分限帳）で確認し、隠居については「諸支配」つまり手廻組、大組、船手組、寺社組等々、各組から「付出」を取って、それぞれ「いろは寄」つまりイロハ順に名簿を作成して調べる（「引しらへ」）こととなつたため、作業には時間を要するとしている。

遠近方が管理した給禄帳は「御根帳」と呼ばれ、形態は横長帳である。家臣の「名替」や異動（加増・減知、組替えなど）があるたびに加筆修正が行われ、書き込む余白がなくなつた場合には、別紙に書いて貼付した^④。この時期、扶持方成^⑤の家臣が増加しており、彼らは「扶持方成」の部に書き出された。借銀を返済すると、元の組か他の組の分限相当の筆並に戻

萩藩家臣団の仮名・実名、名字をめぐって（河本）

された（「扶持方出」）。「御根帳」は、改訂直後のきれいな状態から時間の経過とともに書き込みや付紙が増えて、丹念に確認作業したとしても、どこかに確認漏れが入り込む余地があったと推測する。ゆえに、「いろは寄」の名簿を作成するというのは合理的な方法である。

過去に「同氏同名」の問題はあつたと考えられるが、嫡子の名も登載するようになった元文四年十一月改の給禄帳では「同氏同名」の件数が目立つようになつたのだろう。藩は、「紛敷」（まぎらわしい）として該当の家臣に「名替」を命じた。

次頁の表1は、付立にある一四組の家臣について、給禄帳で「名替」の状況を確認した結果をまとめたものである。このとき、「名替」をした家臣の給禄帳での記載は、次のとおりである。朱筆で仮名が抹消されて「替名」が記され、そして短くその経緯が記された。

（朱筆）

「此度同氏同名双方申談相改候様二御沙汰相成候付、元文五申十二月晦日名替」

（朱筆）

「新右衛門」

村上喜兵衛

嫡子弥郎

式百石

元文四末六拾四才

表1 萩藩家臣団の同氏同名（元文5年（1740）12月）

No.	組	名字	仮名	替名	禄高	備考
1	手廻組	中村	次郎左衛門	—	50石余	膳夫頭
	供徒士	中村	次郎左衛門	小源太	5人5石余	
2	手廻組	佐々木	九郎右衛門	— ○	3人5石	小左衛門嫡子
	地徒士	佐々木	九郎右衛門	〈病死〉	2人5石	嫡子助之進
3	大組	村上	喜兵衛	喜三兵衛	63石	根来組
	船手組	村上	喜兵衛	新右衛門	200石	
4	無給通	井上	吉右衛門	（喜兵衛）	3人4石	長左衛門嫡子
	供徒士	井上	吉右衛門	貞右衛門	3人5石	
5	無給通	栗屋	与右衛門	—	3人3石1斗	
	大組	栗屋	与右衛門	（市左衛門）	41石6斗	八左衛門嫡子 浦組
6	大組	林	喜左衛門	— ○	283石余	矢道組
	中船頭	林	喜左衛門	佐左衛門	3人8石	
7	大組	中村	弥次郎	弥二右衛門	50石	七郎左衛門嫡子 梨羽組
	無給通	中村	弥次郎	（一平）○	3人2石4斗	彦兵衛嫡子
8	大組	飯田	弥五郎	— ○	143石	七兵衛嫡子 梨羽組
	地徒士	飯田	弥五郎	弥左衛門	4人銀200目	
9	大組	児玉	勘左衛門	六郎右衛門	66石4斗	児玉組
	細工人	児玉	勘左衛門	半藏	2人2石4斗	具足師
10	大組	中村	仁左衛門	—	61石9斗	扶持方成
	遠近付	中村	仁左衛門	長左衛門	2人1石5斗	
11	大組	山田	文右衛門	— ○	161石	扶持方成
	無給通	山田	文右衛門	（長兵衛）	3人3石	市郎兵衛嫡子
12	遠近付	中村	平馬	— ○	5人6石6斗	九左衛門嫡子
	地徒士	中村	平馬	治右衛門	2人銀80目	
13	無給通	渡辺	弥五郎	—	3人3石6斗	
	地徒士	渡辺	弥五郎	源右衛門	3人2石5斗	
14	三十人通	尾崎	新兵衛	— ○	3人5石	
	小船頭	尾崎	新兵衛	新右衛門	2人6石5斗	里兵衛嫡子

【典拠】毛利家文庫 52 給禄 107 「分限帳詮議物」、同 46 「元文 4 年分限帳」、同 81 「元文 4 年無給帳」。

（註）①禄高の何人は扶持方を示す。②替名の欄には、給禄帳で確認できたもの、すなわち朱筆で記されたものを示した。— は「名替」をしていないことを示す。③（ ）で括った名は、「付立」と給禄帳に訛謬があるため、給禄帳の記載を掲げたものである。「同氏同名」の「付立」を作成した際に基礎とした資料が異なっていた可能性がある。④○印は、本文で説明するように「名替」にかかる藩の指示を受けて提出した願書が「分限帳詮議物」にあることを示す。⑤No4 無給通井上喜兵衛は給禄帳の記載。譜録によると、喜兵衛は山崎家から養子に入った人物で、その際の仮名が吉右衛門であった。No5 大組栗屋市右衛門は給禄帳の記載。これも譜録によれば、市右衛門の前の仮名が与右衛門であった。No7 中村一平も給禄帳の記載。No11 無給通山田文右衛門は市郎兵衛嫡子とあるが、給禄帳には長兵衛と記されており、「付立」作成の際に混乱があったようだ。No13 両「渡辺弥五郎家」はともに給禄帳での通称は弥兵衛となっている。

表の欄外にも記したが、「付立」と給禄帳の記載の間に矛盾がある。具体的には「付立」の仮名と給禄帳のそれが合致しない箇所があることである。朱筆による現名の抹消・「替名」の書入ではなく、本人あるいは嫡子の「替名」と思しき仮名が墨書されている箇所があった。当館に残る元文四年十一月改の「給禄帳」は、原本ではなく、後年に作成された写である。写作成の際に朱筆による訂正を省略した可能性もある。

さて、一四組の対応について見ていこう。No. 3の村上喜兵衛とNo. 9の児玉勘左衛門は、双方が「替名」を提出した。表の「替名」欄の○印は、藩の改名指示に対して願書や届書を提出したことを示している。このうち、No. 6の大組林喜左衛門（宍道式部組）は、「同氏同名」の「中船頭」の林が「名替」をしたので当方は申し出ないと、同組証人林八郎左衛門を通じて遠近方へ次のとおり届けた。

宍道式部殿組

林喜左衛門

右中船頭之内二同氏同名御座候処、中船頭林喜左衛門名替之儀申出之由二付、右喜左衛門儀名替之儀申出間敷之通申出候、此段御届仕候、已上

十二月廿五日

林八郎右衛門

（遠近方）
三戸与右衛門殿
和智九郎左衛門殿

右と同様の届書が、「分限帳詮儀物」に複数記録されている。No. 8、No. 11、No. 12、No. 14である。それぞれ家格・筆並上位の者が提出している。「筆並」下位の者が「名替」を申請したので自身は「替名」をしないというものである。藩は年末までの同氏同名の解消を指示し、当事者で相談して落着かない場合は、双方が「名替」するということだったが、実際は家格・筆並による付度が働いた可能性はある。

なお、No. 2手廻組の佐々木小左衛門は、「彼方儀ハ先頃病死之由ニ御座候、然者世忤儀名改候ニハ及間敷哉与存候、然共下として治定難仕奉存候間、此段御物筋江被仰伺、何分御沙汰可被下候、已上」と願書を提出している。地徒士佐々木九郎右衛門が病死しているので、自身の忤九郎右衛門は「名替」を申し出なくてよいと思われるが、「下」（家臣）の立場では判断できないので「御物筋」（ここでは遠近方か）へ伺って沙汰してほしいと、手廻組証人へ提出している。

次の願書は、No. 7の無給通中村彦兵衛が提出したもので先方と協議した経緯を記しており、当時の家臣の認識を示すもので興味深い。

申上候事

十二月廿六日

中村彦兵衛

（藏五高入役）
同 榎崎吉右衛門殿
山縣藤助殿

此度同名有之候者ハ申談名替仕候様、尤相談難折相候ハ、
双方名替可仕之通御内意御座候、中村七郎左衛門嫡子弥次
郎私忝弥次郎同名ニ而御座候、私家筋ハ元就様御時代御奉
公仕候中村弥二郎家筋正統ニ而、輝元様迄御代々之御感状
其外御判物数通頂戴仕、今以所持仕罷居候、中村七郎左衛
門家筋之儀ハ、私先祖次郎左衛門次男九右衛門新規ニ被召
仕候家筋ニ而御座候処ニ、先年以来趣有之一家之因不仕候、
然共此度御内意ニ付、七郎左衛門江私忝弥次郎相对仕、先
祖弥二郎家筋正統無紛証拠ニ相成候書状等之写仕、致持参
七郎左衛門入披見及相談候之處ニ、彼方ニ茂申伝有之付来
候名之由ニ而、内談折相不申候、然者被仰出候通、双方名
替之儀申出候外無御座通申相候付、私忝弥二郎名替之儀別
紙を以申上候、右之通先祖弥二郎家筋正統無紛段者申伝等
計ニ而ハ無御座、右正拠ニ相成候中村七郎左衛門家方之書
状其外所持仕居候、此度之儀ハ双方内談難折相候ハ、何
連も双方共名替之儀申出候様ニと被仰渡候付奉得其旨、名
替之御願申上候得共、先祖名之儀ニ御座候得ハ、追而同名
無之節ハ猶又弥次郎へ相改度奉存候間、此段被聞召上置被
下候様ニ与奉存候、已上

中村彦兵衛の忝弥次郎（弥二郎の表記もある）は、中村七郎
左衛門の忝と同名であつたため、話し合いのため七郎左衛門家
へ出向いた。その際、彦兵衛家に伝わる元就から輝元まで代々
の感状ほか判物の写を作成して持参した。中村彦兵衛家は本家
であり、七郎左衛門の家筋は、彦兵衛家の先祖次郎左衛門の次
男九左衛門が新規に取り立てられた家であり、彦兵衛家からす
れば分家筋に当たるとした。元来は親類だが、「先年以来趣有
之一家之因不仕候」と疎遠になっていることも述べている。

彦兵衛の忝弥次郎は、証拠物の写を作成して七郎左衛門家
へ出向いて協議したが、七郎左衛門家の方も自分の家にも言い
伝えがあり、弥次郎の名は家にとっては由緒のある名前である
と主張して譲らず、内談は不調に終わった。藩は、話し合いに
よつて解決しない場合は、双方が「名替」するように指示して
おり、それにしたがつて「私忝弥二郎名替之儀別紙を以申上候」
と、彦兵衛の忝も「名替」の届出をした。

しかし彦兵衛家側は、弥次郎という仮名は「先祖名之儀ニ
御座候得ハ、追而同名無之節ハ猶又弥次郎へ相改度」と、今後、

同名がなく「弥次郎」を名乗れる時が来た場合は、彦兵衛家の由緒ある名前なので名乗りたいと藩に願ひ出た。

このように、仮名（通称）に対する思い入れは、本人は勿論家族にも強くあつたと思われる。右の中村彦兵衛のような感覚は、多くの家臣が持つていたものと思われるが、一方で上からの指示は受け入れざるを得なかったのであろう。

なお、無給帳の記載は、中村彦兵衛の左傍に「嫡子一平」と墨書されて、弥次郎の名は見えない。弥次郎の名を朱消して一平の朱書きがあれば合点がゆくのだが、付立が作成されたとき、嫡子の名は「弥次郎」だつたはずだが、伝わる資料の有り様からは、無給帳の写を作成する段階で何らかの混乱があつたものと推定しておく。

なお、No. 1、No. 10、No. 13 は、給禄帳の記載どおりで同氏同名は解消されている。○印を付した家臣のように片方だけが「名替」をしている。No. 4 は、供徒士の井上が貞右衛門と「名替」したことが確認出る。無給通の井上の方は無給帳で喜兵衛とある。No. 5 の大組栗屋の嫡子の名は、分限帳には市左衛門とある。同家の譜録を確認すると市左衛門の前に与右衛門と称していたことは確認できた。無給通の栗屋の「名替」については確認できない。両栗屋の場合は、ほかの事例と異なつて、筆並

が上の家臣の方が「名替」をしていた。

二 家臣の仮名・実名、名字と萩藩主

関ヶ原戦後、毛利家では、輝元が隠居し宗瑞を名乗つた。翌年、幼少の秀就は、親と離れて江戸に赴き証人として在府することとなった。輝元は表向き隠居したものの、毛利一門ほか重臣とともに初期の萩藩政を動かし、初代藩主である秀就を支えていた。

輝元は家臣に対して幅広く接点を持ち、家臣の元服にあたつては「加冠状」を發給し、諱の一字「元」（偏諱）を与えていた。家中すべては網羅していないものの、享保期に編纂された「閥閥録」を見れば、下級の家臣に対してもかなり広汎に「加冠状」「一字書出」を發給していたことがわかる^⑤。このほか「仮名書出」「官途書出」「受領書出」を發給して、家臣の仮名も与えていた。父輝元と同様に、慶長十六年（二六一）十二月に初入国した秀就も家臣に対して幅広く自身の下字である「就」の一字を与えていた。そのほか判物も同様であつた^⑥。「元」や「就」の一字を拝領した家臣たちは、例えば、元通・元時、就通・就時等々と自身の実名に用いた。

家臣の側では、拝領した判物を「名替之御判物」などと呼んで有り難がつていた。たとえば、大組井上五左衛門家では、提出した譜録^⑧の伝書に「元和五十一年廿日名替之御判物、秀就公方被下置候事」と記し、仮名書出（「任 半左衛門尉」）を「御書御判物写」に写して提出した。

ちなみに家督相続に関する安堵状（書正文言が「仍而一行如件」、いわゆる一行状）は、関ヶ原戦後も輝元が発給していたが、秀就初入国の頃には、輝元・秀就が連署したものが現れた。いずれにせよ、家臣の立場からすれば、本人のみならず家族や親族にとつても光栄なことであり誉れであつたと思われる。

輝元・秀就の時代は、それぞれの実名（諱）の下字（元・就）を幅広く家臣へ与えていた（「二字書出」）。また仮名（通称）についても、仮名書出・官途書出・受領書出を発給していた。仮名・実名ともに幅広く家臣に対して命名に関わつていたという表現も間違ひではなからう。

ところが、秀就が慶安四年（一六五二）正月に他界して幼少の綱広が後継となると、様相が一変する。先に掲げた判物については、ほぼ発給されなくなった。表2は、「関関録」に収録された毛利綱広の判物を一覧にしたものである。綱広が家督を継いで間もない承応年間には、数人の家臣へ「官途書出」が発

給されたが、綱広の判断・意思とは関係なく、それまでの慣習に従つて一門を中心とした加判衆の判断によつて発給されたと思われる。

また家臣の家督相続にあたつて藩主が発給していた、安堵状も姿を消した。判物としては発給されなくなったが、一門八家の家督相続については、藩主が直接それぞれの家に対して書状（直書（内書））を発給した。その際、加判衆連署奉書も当該の家に発給された。寄組以下の家臣の家督相続については、加判衆連署奉書が発給されるのみとなり、秀就まで発給された判物は姿を消すこととなった。いずれにせよ、綱広の代になつて、それまで幅広い階層の家臣に発給された判物は、ほぼ姿を消したのである。

延宝八年（一六八〇）の書付に次のようにある^⑨。

一御当代御家来江御字未被遣候付、各相談之上、達上聞候之處、御一門中并加判役之衆へハ、御字拝領被仰付、其外之衆へハ追而可被仰出之旨候之間、御留守居中被仰談、いつれ役人被相定、其沙汰被仰付答二候事

「御当代」つまり毛利綱広の代になつてから「御字」（二字、偏諱、この場合は綱広の広）が遣わされなくなった。このことについて加判衆を中心に話し合つて殿様へ申し上げたところ、

「御一門中并加判役之衆」つまり一門八家（宍戸・右田毛利・厚狭毛利・吉敷毛利・阿川毛利・大野毛利の一門と、永代家老益田・福原の二家）と「加判役之衆」（寄組の家臣としておく）には一字拝領を仰せつけられた。「其外之衆」つまり大組以下の家臣には、追って沙汰するとし、いづれ役人を定めて「其沙汰

表2 毛利綱広が発給した判物

卷	号	文書名	宛名	年月日
16	34	毛利綱広知行宛行状	梶森就幸	承応2 (1653) 6. 10
12	8	毛利綱広官途書出	桂就政	承応2 (1653) 6. 18
26	19	毛利綱広官途書出	児玉就征	承応2 (1653) 6. 18
28	10	毛利綱広官途書出	井原就久	承応3 (1654) 7. 1
28	11	毛利綱広官途書出	井原就行	承応3 (1654) 7. 1
30	3	毛利綱広知行宛行状	繁沢就充	寛文9 (1669) 2. 28
15	69	毛利綱広一字書出	国司広直	天和2 (1682) 9. 6
28	1	毛利綱広一字書出	国司広通	天和2 (1682) 9. 6
13	53	毛利綱広一字書出	山内広直	天和3 (1683) 11. 1
24	19	毛利綱広一字書出	佐世広長	天和3 (1683) 11. 1
17	77	毛利綱広一字書出	児玉広行	貞享2 (1685) 12. 1

【典拠】山口県文書館『萩藩閥閥録』第1巻 (1967年)。

(註) 梶森(志道)と繁沢への知行宛行は極めて稀な処遇で、幼少で家督を継いだ綱広を支えた功労によるものであろう。

被仰付筈二候事」としている。この書付では、方針としては前代のようにするという考えはあるものの、明言は避けた内容となっている。

表2によれば、天和二年（一六八二）から「一字書出」が発給されるようになったが、同年二月の綱広隠居後のことであった。次代の吉就以降、寄組以上には一字が与えられたが、大組以下の家臣には、偏諱が与えられることはなかった。

代替わり以降、藩主の一字が与えられなくなったことは、家臣団の共通認識としてあつたと解される。前代までの慣習が継続されないことに対して、家臣団の中核をなす大組の家臣を中心に不満があり、加判衆を務める一門八家・寄組の家臣たちも同様に不満を抱いていたと思われる。

主従関係において家臣の側からみれば、藩主の「御恩」を表現した判物の発給がなくなったという現実、不満が出てもし思議はない。関ヶ原戦以降、戦さによる領地拡大に伴う恩賞はほぼ期待できない時代に入っており、家臣が番方・役方の務めによって余程際立った働きをする以外には、なかなか加増も期待できなかった。秀就時代には、家臣の生涯における節目ごとに丁寧に判物が発給されていたことを知る家臣団からすれば、幼少で家督を相続した綱広の代になってから、それがなくなること

に対する疑問や不満があったことは間違いない。

管見のかぎり、これ以降に藩の方針が示された書付や記録はない。国司広孝の「聞書」のなかに、次の記載がある⁽¹⁰⁾。

一二字之判物ハ（中略）於御当家者従往古上輩江者堅紙、組付者横折与見え候、然共綱広公以来一切組付江之御判物被下候儀ハ無之候事

毛利家では、「二字書出」は「上輩」（寄組以上）には堅紙、「組付」（大組）は横折（折紙）で発給されていたが、綱広の代になってから「組付」には判物が発給されなくなったという客観的事実を記すのみで、その理由については記していない。当時でも発給されなくなった事情は判然としなかったのだと思われる。この点については、筆者も回答を持ち合わせておらず、今後の検討課題としたい。

なお、「聞書」にある「組付」への判物は、横折奉書だったとする記述と違い、大組の家々が伝える判物の多くは堅紙である。横折の判物は、大組よりさらに下の者へ発給された場合が多いことを指摘しておく。

述べたように、輝元・秀就父子は幅広く家臣に諱と仮名を与えていた。それに止まらず、「名字」についても関与することがあった。「関聞録」だけ見てもかなりの事例に気付く。

輝元の時代、例えば、慶長元年（一五九六）正月に安国寺恵瓊を通じて輝元へ「名字替申度」と願ひ出た周布吉兵衛は、「其方名字之事、先以杉岡可然候」と「杉岡」への「名字替」が許されている⁽¹¹⁾。

秀就が関わった事例も多い。大組新山家は、元々の名字「新屋」が商人の名のように聞こえるという理由で、藩主の命によって、新山に「名字替」をした⁽¹²⁾。また秀就の小姓として仕え、その後諸役を務めた竹田就景は、「竹田之名字」は「医業之身柄ニ而茂無之候条、竹田之名字相改候様ニ」と秀就の命令で、小浜に「名字替」をした。さらに、母方の本家毛利宮内殿就方（阿川毛利）から「三浦之称号」の免許をうけたうえで、願ひ出て三浦に名字を替えた⁽¹³⁾。このように、藩主の命によって家臣が名字を替えることがあった。

以上、藩主の意向によって、家臣の仮名・実名、名字が替わる、あるいは替えられることがあった。また家臣側からそれらを変更する願書が提出されることもあった。仮名（通称）、実名（諱）、名字をめぐる、藩主と家臣の関係は、秀就の代と綱広の代で濃淡があった。前者のときは、家臣の諱に用いる一字や仮名について判物を発給し、また名字についても藩主が指示して替えさせることもあった。それは形式的なものかもしれない。

いが、それだけ主従の関係が濃密だったといえるだろう。

三 「名字替」「名替」の問題

秀就の時代、家臣は藩主から拝領した「仮名書出」「官途書出」「受領書出」に記された仮名（通称）を名乗った。藩主から拝領した仮名は、簡単に変更できるものではなかったと考えられる。この時代、判物を拝領できない家臣もいたはずで、その家臣たちは、自らの仮名を届け出ていたと思われる。

綱広の代になると、既に述べたように、判物による仮名の拝領はほぼ皆無となった。家臣は、それぞれ仮名を藩へ届け出て、それが認められると、それを名乗った。その後、家臣それぞれの事情で、「名替」を願い出ることがあった。名字の変更についても、藩へ届け出て承認される必要があった。

表3は、延宝七・八年（一六七九・八〇）に「名字替」「名替」を願い出て許された家臣の一覧である。合わせて二一家あり、その全てが「名字替」をし、一〇家は「名替」もしている。延宝八年の「名字替」の家臣はすべて「本名」に戻したとある。「名字替」が簡単にまた頻繁に行われること

は、それ自体混乱を招く要因になるだろう。

藩としては、家臣の「名字替」「名替」に関して一定の基準を示しておく必要があったと思われる。

次の法令を見ておこう（14）。

名替・名字替之御理近年猥相成候故、右之通ニ可被仰付と
の物談ニて御国へ申遣候事

表3 「名字替」・「名替」の例

年	月	日	家臣名	変更後
延宝 7 (1679)	1	26	江原十兵衛	土肥小介
	3	11	前原久左衛門	馬屋原久左衛門
	3	11	塩谷伝右衛門	小幡助右衛門
	3	11	浅屋一郎左衛門	小幡彦七
	3	11	塩谷伝右衛門	小幡伝右衛門
	3	11	塩谷宇兵衛	小幡宇兵衛
	10	13	杉岡左介	周布孫右衛門
	10	13	杉岡九郎兵衛	周布九郎兵衛
	10	13	斎藤源右衛門	山名源七
	12	29	太田祖閑	中原治兵衛
延宝 8 (1680)	4	13	三保十右衛門	羽根喜平次
	4	13	末近五郎兵衛	中原五郎兵衛
	4	16	斎藤四郎左衛門	山名四郎左衛門
	4	16	井上六左衛門	河野六左衛門
	4	16	小林平八	奥平源兵衛
	4	16	三輪新右衛門	洪屋木工左衛門
	9	27	上田市左衛門	国貞甚右衛門
	9	27	永原小兵衛	児玉小兵衛
	9	27	須子半右衛門	高田半右衛門
	12	14	大深五右衛門	嶋田五右衛門
	12	29	河野半兵衛	赤川彦兵衛

【典拠】毛利家文庫22 諸臣 54「御家来万控」。延宝7年は改名前後の名のみが記される。同8年は短文で記載され、先祖の名とある赤川以外は「本名」への「名字替」とある。

萩藩家臣団の仮名・実名、名字をめぐって（河本）

一名・名字共二、縦先祖之名・名字たりとも御断不被及御沙汰候

但、替候へて不叶子細指向たる儀にて、理於至極者各別之事

付、名之儀、若輩名にて元服をも仕たる上にてハ、名乗くるしき若輩名などは被遣事

（以下、付書二ヶ条略）

この法令は、天和二年（一六八二）七月二日に当役栗屋帯刀から国元へ伝えられたものである。「名替・名字替之御理近年猥相成候故」と、近年家臣からの願い出が猥りになっていることから、名字・名ともに先祖のものであっても簡単にそのことは認められないとする方針が示された。表3は、「猥り」になった一端を示すものかもしれない。「名字替」や「名替」をしないと支障があるという、特段の理由があれば許可するが、それ以外は認めないとするものである。元服後の名乗りとしては支障がある若輩名や、省略した付書で家に伝わる由緒ある名については特別に認めるとしている。

次に、宝永五年（一七〇八）の法令^{（15）}を見てみよう。

覚

一童名方男名改候儀、前々之通勝手次第之事

一童名方男名二改候儀、前廉被遂御分別候、雖然先祖之名にても無之候故、或父之名或祖父之名其外先祖之名二改度願ハ、其子細書付申出候事

一童名を右之通父・祖父・先祖等之名二願出、一旦被遂御分別候を、又先祖之名二改度との願ハ自由之様相聞候、然とも祖父之名を付居候得とも、父之名二相成度との願ハ格別之事

但、右之分父或祖父又ハ先祖等之名被遂御分別候得とも、身近き間二同名有之或同名字二て何右衛門・何左衛門などの紛たる事有之、改度との願者^{（16）}是又格別之事

最初の箇条にあるように、「童名」を「男名」に改めることは「勝手次第」としている。これは、家臣個々が自由に「男名」を名乗れることを意味するが、届け出て認められる必要があつた。そして、一旦「男名」を届け出た後に、それが先祖の名と無関係な場合、父・祖父・先祖の名に改めたいときは、その理由を述べて申し出れば認めるとしている。

また父祖の名に改めたのち、再び別の父祖の名に改めることは自由のように考えられているが、父の名は格別としていることから、父以外の先祖の名に、次々に変えていくことは好ましくない^{（17）}と藩は考えていたと思われる。そして「身近き間」つま

り親類と考えられるが、「同名」の者がいたり、「同名字」で「何左衛門」「何右衛門」と似たような名前があるので「名替」をしたい場合も格別としている。願ひ出れば、簡単に「名替」ができるという、大方の家臣の認識を改めさせることを狙ったものだろう。

その後、家臣の仮名（通称）については、寛延二年（一七四九）の法令^{（16）}が注目される。

覚

御家来中同氏の両家方同名を願出候衆有之、両家共二不及沙汰、願書付差返候儀彼是有之候、古キ家筋之儀ハ本末難分り茂有之、又本末者分明ニても父祖之志を以、先祖之名を次男・三男ニ付ケ置、子孫至りおのづから家名之やうニ相成たるも可有之候、右之類當時見渡之道理を以及争論、公儀へ申出被遂御僉儀候而も、其証拠も不分明、本躰ハ差置、申結之是非ニよつて御咎も有之様ニ相成候而者、甚以不宜儀候、惣而他門ニても一和仕遂御奉公候儀勿論候処、親類間是等之儀申募、御妨を掛候儀有之間敷儀ニ付、自今以後両家争有之名願出候儀一向被差留候、万一不折相之内相願、縦被遂御許容候以後たり共、一方方不折相之段申出候ハ、不構理非名替可被仰付候事

萩藩家臣団の仮名・実名、名字をめぐって（河本）

付、只今迄先祖名之儀ニ付、申結有之衆名替相願被遂御許容候と有之由候へ共、此儀之御沙汰以前之儀ニ付名替者不被仰付候、以来代替り等ニ至り名之争於有之者前條之趣を以、可被相心得候事

一同氏同名有之候而者、紛ハしき儀ニ付本人嫡子共ニ申合改候様ニと元文五年被仰付、於于今者同氏同名之衆無之候、然処嫡子令出生名付仕置、追而申出候儀ニ付、自然之同氏同名令出来候、ケ様之節者遠近方双方へ内意可相達候条、申談、一方可有名替候、若申談難折相趣も候ハ、双方共可被相改候事

右之通相心得候様組支配江茂可被申触候、以上

寛延二己二月 益 河内

最初に、同氏の両家から同名の申請があつた場合、双方ともに認められないと規定している。同氏の親類の中で本家を主張する者もいるが、本・末がはっきりしないこともある。また本末が明確な場合でも、先祖の名を次男三男に命名して家名のようにする向きもあるが、それらは争論の要因となり、家臣団の「一和」を乱すこととなる。争いの対象となっている名については今後認めないとするものである。

次の簡条では、「同氏同名」が問題となつた元文五年の先例

を述べて、その後は同様な問題は発生していないとしている。ただし、嫡子出生後、仮名を届け出た場合、自然と「同氏同名」の問題が生じることもある。その際、遠近方が双方へ伝えて協議して「一方」の「名替」を促すものとするが、もし折り合いがつかない場合は双方とも改めよとした。

その後、藩は嫡子出生後の届け出について、たびたび注意を促した。次の法令⁽¹⁷⁾は、明和二年（一七六五）三月のものである。

御家来中嫡子出生仕候節者、早速支配方江相届可申段、勿論之儀候、然処ニ嫡子仕候段早速不申出を茂、間々有之、兼而御沙汰茂相成候処、甚不心得之事候、向後右躰之儀於有之者依品被仰付方可有之候事
右之通被仰付候条、只今迄不相届分も早々申出候様可被相触候、以上

嫡子出生のときは、まず支配方（所属する組）へ届けることを確認している。届け出をせず放置している例が見られ、不心得であり、場合によっては処罰するとした。

また安永元年（一七七二）の法令⁽¹⁸⁾では、嫡孫も届け出の対象であることを明示した。

諸士中嫡子嫡孫出生之砌、相届候儀勿論候、嫡子本人相

成候時、嫡孫者嫡子ニ相成候、其段早速相届答候処、最前嫡孫出生之時分届候故、其以後届不及と心得候者も有之様相聞候、向後之儀者嫡子本人ニ成候時、其嫡子有之者ハ頃日可相届候、於支配方も名付年付相調、即日可申出候、尤只今迄右躰之者有之候ハ、早速可申出候事

諸士嫡子嫡孫有之者、嫡孫病死又ハ家統不相成時、二男孫・三男孫等於有之者嫡孫成申出候ハ、可被差免候、孫養子ニハ只今迄之通不被差免候事

嫡子が本人になったとき、つまり家督を継いだときは嫡孫が嫡子になる。その際、改めて届け出ることを求めている。嫡孫出生の時にだけ届け出れば済むわけではなく、順をおって届け出るように指示している。届け出先の支配方でその者の「名付・年付」つまり名前と年齢を掌握するよう求めている。またこの法令では嫡孫が病弱で家督が取れない場合は二男孫・三男孫等がいれば「嫡孫成」をさせて届け出るようにとしている。

なお、嫡子の名（童名・男名）・年齢、嫡孫のそれについては、支配方つまり各組で整理・把握して遠近方に届けるように藩は指示した。それは遠近方の実務が多く、本人だけならいざ知らず嫡子・嫡孫まで整理・把握するには多忙すぎると

いう判断からであった。

萩藩は給禄帳によって家臣団を管理・掌握していたが、元文五年に生じた同氏同名の問題は藩の管理が不十分であることを露呈した。その後、家臣の仮名の届け出、その後の「名替」の届け出、また嫡子出生後の届け出、嫡孫出生後の届け出等々、法制を整備することによって、より細かく家臣団を掌握することを狙ったようだ。

おわりに

小稿では、萩藩家臣団の仮名（通称）・実名（諱）・名字について若干の考察を試みた。

元文五年（一七四〇）、家臣団の同氏同名の問題が生じると、藩は紛らわしいとして、該当の家臣へその仮名の「名替」を命じて同氏同名の解消をはかった。仮名は、家臣の家ごとに歴史・由緒があり、また思い入れもあつて、場合によっては係争に発展する可能性もあつた。藩は、各家臣の禄高と名字と仮名を記した給禄帳で家臣団を把握していたが、十分ではないことが判明したため、家臣本人の仮名だけではなく、嫡子の出生からその名前の把握を始めた（やがて嫡孫も）。そのことによつ

て同氏同名の問題の発生を未然に防ごうとしたと考えられる。

初代藩主秀就の時代は、多くの家臣の実名（諱）・仮名（通称）は、拝領した判物（二字書出、仮名書出等）によっており、藩主から名前を拝領していた。二代綱広以降は、判物発給は限定的となり、一字（偏諱）を拝領する寄組以上を除いて、主君から名前を拝領することはなくなった。この変化によって、家臣は仮名を藩への届け出を行った後、「名替」もたびたび行う者もいたようで、そのことがまた混乱を招いた。そのため、猥りに「名替」が行われないよう基準を示した。

なお、小稿では、藩による家臣本人・嫡子・嫡孫の仮名や年齢の把握に関する法制について、十分には追究できなかった。今後の課題としたい。また藩政初期からの制度的変遷について明らかにしていきたい。

註

- （1）田中誠「『萩藩財政史の研究』 塙書房、二〇一三年。同書一八五頁の表⑥によれば、元文期の家臣数は五六〇〇人を超える。このうち、足輕・中間ほか「凡下」の人数を差し引くと、名字を持つ家臣は、およそ二七〇〇家である。

(2) 毛利家文庫 52 給禄 31。以下、毛利家文庫については、文庫と略す。

(3) 文庫 52 給禄 107 「分限帳詮儀物」。

(4) 当館が保存する萩藩の給禄帳の大部分は写である。遠近方が現用した「御根帳」「横長帳」は、文政十年（一八二七）以降のものが計一冊ある。家臣の異動は、まず朱筆で書かれ、さらに異動があると墨筆で書き込まれた。拙稿「萩藩の分限帳・無給帳と遠近方」（『山口県文書館研究紀要』四八、二〇二二年）参照。

(5) 扶持方成とは、家臣の借銀が嵩んで家中役が務められなくなり、その知行を藩が管理下に置いて借銀返済を行う制度である。返済まで当人には扶持が与えられ、家中役は免除された。

(6) 元服の際に発給される加冠状に一字が記されたものもある。

(7) 『萩藩閥閥録』巻一〜四（『遺漏』を除く）に収録された毛利秀就の判物は、それぞれ延べ数で、官途・仮名・受領書出一一一通、加冠状・一字書出三〇六通、安堵状二二〇通ある。無給帳登載の家臣のほか、足輕、町人、庄屋など、発給対象は幅広い。

(8) 文庫 23 譜録い 4 「譜録 井上五左衛門忠亮家」（寛保元年）。

(9) 文庫 40 法令 15 「御書附 延宝三年ヨリ 地方諸法度 全」。

(10) 文庫 16 叢書 36 「聞書 上・中・下」。目録の解題には、寄組国司広孝が諸士や諸書よりの見聞を順不同にまとめたもの、とあ

る。

(11) 「閥閥録」巻 121 / 3 周布吉兵衛（『萩藩閥閥録』巻 3）。

(12) 「閥閥録」巻 85 新山十郎左衛門（『萩藩閥閥録』巻 2）。

(13) 「閥閥録」巻 78 三浦判左衛門（『萩藩閥閥録』巻 2）。

(14) 文庫 31 小々控 3（2 の 2）「天和四年 諸事小々之控五十」。

(15) 文庫 9 諸省 51・1 「諸触書拔五」。

(16) 文庫 9 諸省 51・5 「諸触書拔五」。

(17) 文庫 9 諸省 35・5 「触書拔五」。

(18) 同右。